

2024 6



ナイル

現代短歌ナイル

【今月の歌】

橋本涼、広井まさみ

二方久文、小村井敏子

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

芙貴子ワールド

「赤い電車」に寄せて／松本芙貴子

4月号作品批評／宮本史一(心の花)

夏の大会詠草集



NILE CAMPUS

300

伯梅閑話 — 仏壇の写真 — 小村井敏子（五代目神田伯梅）

伯龍の妻となることを受け入れることができたのは、こんな話を聞いていたからだ。友人の父が再婚した時、気が付くと亡き母の物がなくなっていたというのだ。再婚した方が処分したのだ。伯龍の芸を支えた千代夫人の物は私から見ると宝物。それが、友人の亡き母の物と同じ扱いを受けるのは、我慢がならない。それを防ぐためには、伯龍の望みを受け入れて妻となるしかなかった。伯龍にゲットされたのは、思いがけないことだった。そのとき、私の第一歌集が印刷にかかっていた。そのため、第一歌集に載せた住所氏名が、出版記念会のときには変わっているということになった。歌詠みにとって、歌集は名刺のようなものだと思う。だから、住所を載せる。女性は旧姓を名乗る方が多いが、私は、新しい姓を選んだ。旧姓のとき、いいことがなかったからだ。出版記念会は、さながら、結婚披露宴になった。琉球舞踊を習っていたので、千代夫人の着物に紅型を羽織った。沖繩の結婚衣装だ。千代夫人に守っていただかなければ、伯龍の相手はできないと思ったから千代夫人の着物を着たのだ。

亡くなる前に、「私が死んだら、あなたも死ぬんだから」と言って、伯龍のなにくそ魂を刺激した方だ。千代夫人が望むのは、伯龍が講師として活動し続けることだと思っただ。伯龍と暮らして、いつも、何をしたら千代夫人に喜んでいただけるかと考えていた。伯龍が亡くなったあとは、伯龍が見守ってくれていると思っていた。私が心豊かに暮らしていることが、伯龍の喜ぶことだ。伯龍はいつも一緒にいるように感じる。人は亡くなると、千里の距離も一瞬で移動できるという。亡き妻と私の間を瞬時で移動していることだろう。仏壇の伯龍・千代の写真は、湯島の聖堂で宮岡氏が撮った伯龍と千代生前最後の伯龍独演会の時、国立演芸場で撮った千代夫人の写真だ。二人の写真は、なにげなく、お互いの方を見ているのだ。その仲の良さに見るたびに、ほんわかしている。